コレンテ　vol. 37　n.309　　agosto　2016

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマ滞在日記⑦

＊ダル・ヴェルメでライブをした話＊

二宮 大輔

京都の御所南にネガポジというライブハウスがあった。数多くある京都のライブハウスの中でも特に人気で、その立地から京都大学などの学生たちからも愛されていた。居酒屋風に装飾された店内、出演するミュージシャンも京都土着の流れを汲んだフォーク・ロックが主流をなしており、見ごたえがあった。そのネガポジが急きょ閉店を発表したのが昨年の 8 月。理由はネガポジが出す騒音に対する近隣からの苦情。件のライブハウスはマンションの地下に位置しており、上階の住民から苦情が絶えなかったらしい。ネガポジ側の立場からすると決して大きな音を立てていたわけではない。平日は、ドラムセットを使わない弾き語りのイベントのみにするなど、細心の注意を払っていた。それでも折り合いがつかず、12 月いっぱいであえなく営業終了。その後は移転先をみつけ、現在は別の場所で営業している。移転後のネガポジを訪ねた際、店長からこんな話を聞いた。

「店を閉める 12 月の一か月間は、マンションの住民をライブに無料招待したんです。もうなくなるので、最後に僕たちがどんなことをしていたのか見に来てくださいってビラを各ポストに投函して。結果、一人も来ませんでした。心底興味を持たれていないんだと思いました」。彼には長年続いた店を閉める悔しさもあっただろうし、自分たちのしていることは音楽文化の発信なのだという誇りもあったのだと思う。ただ、騒音に悩まされる住民側からしてみれば、挑発的なメッセージに思えたのかもしれない。

ネガポジの一件は、2012 年に大阪のクラブ NOON の店長が無許可で客にダンスさせたとして風営法違反の罪に問われた事件を思い出させる。当時、ここでいう「ダンス」は性風俗の秩序を乱すものなのか、文化の一体系として尊重すべきものなのかという議論が大きく取り沙汰された。そして 2014 年に NOON 店長の無罪判決が言い渡された時、クラブカルチャーを支持する多くの著名人が喝采の拍手を送った。その一方で表明はしていないが、判決を不服に思った人もおそらくいたことだろう。どちらの主張が正しいかの前にまず、ライブハウスで行われている音楽、クラブで行われているダンスを蔑視する人たちは、それらが具体的にどのようなものかを理解しようとしていない。そして、閉店直前のネガポジは特別な例として、ライブハウス側も無理解な人々に理解を促すような活動をしていない。相互理解の段階に達するまでには程遠く、対立構図をとる両者のあいだに如何ともしがたい隔たりがあるというのが問題なのだ。

【ローマのライブハウス　ダル・ヴェルメ】

ここで視点を変えて、イタリアの事例から問題を考えてみたい。ローマ市南東にピニェート(Pigneto)という地区がある。戦後すぐは貧困層の居住区だったが、ピエル・パオロ・パゾリーニが『アッカットーネ』を撮影したバールを改装したネッチ・クラブを始め、現在ではおしゃれな店が立ち並び、映像作家や画家など、芸術家肌の若者たちが住みついており、ちょっとした文化基地の様相を呈している。そんなピニェートにダル・ヴェルメ(Dal Verme)というライブハウスがある。ピニェート地区の端っこにある小さなライブハウスで、一階にバースペース、地下一階にステージが設けられていた。地下一階は倉庫を改造しただけのようなちゃちなつくりで、食料品店か何かの店舗に居抜きでライブハウスが入ったであろうことが容易に想像できた。何を隠そう、五年ほど前、私がローマで結成した日本人パンクバンド・おにぎりボーイズでダル・ヴェルメに出演させてもらった過去がある。演奏の出来はそんなによろしくなかったが、特に告知もしていないのに、たくさんの観客が来て、小さいながらも店はたいそう盛り上がっていたと記憶している。

【おにぎりボーイズ】

ピニェートには他にも数件、ライブが楽しめる店があり、夜な夜な近所の住民や学生たちが集まってはお酒を飲みながら音楽を聞いたり、お喋りをしたりしている。これらの店は、年会費(8 ユーロ)を払ってアルチ(Arci)の会員カードをつくると無料で入場できるようになる。アルチの正式名称はイタリア・レクリエーション文化協会(Associazione Ricreativa Culturale Italiana)で、その発足は 1950 年代にまでさかのぼる。イタリアでは、このような小さな地域文化をバックアップする仕組みがしっかり構築されているのだと、たいそう感銘を受けた。

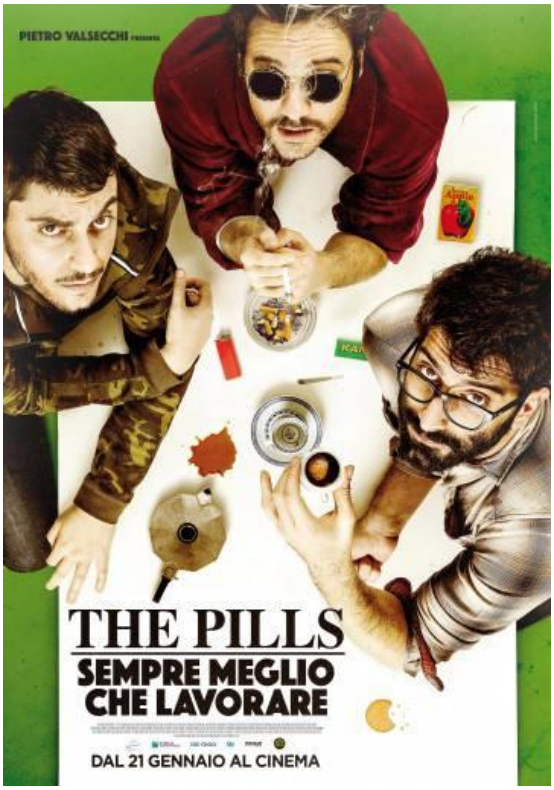
立地の良さも、ピニェートが人気になった理由の一つだ。ピニェートをさらに郊外へ進んだところにあるプレネスティーナ通りには路面電車が走っており、距離はあるもののローマ大学にアクセスがいい。ゆえにプレネスティーナで安アパートを間借りしている学生にとっても、近隣のピニェートは格好の遊び場になったのだ。

しかし今年の 5 月上旬、そんなダル・ヴェルメが営業停止になったというニュースが飛び込んできた。なんでも当局が突如介入し、強引に営業停止に持っていったらしい。とりあえずの停止期間は三十日。6 月 5 日に晴れて営業再開となったが、当局の捜査は続いているという。ダル・ヴェルメの主張では、そもそも営業停止の根拠がよくわからないという。TULPS(公共安全の全法典集:Testo Unico delle Leggi di Pubblica Sicurezza)の第 100 条に則って、ダル・ヴェルメが市民の安全を脅かす店舗であると判断し、当局の一存で営業を差し止めた。しかし「市民の安全を脅かす」と判断された具体的な基準はどこにもない。市の行政に説明を求めているが、現在まで何の返答ももらっていないという。経営者の一人アンドレア・マルツィアーノはインタビューでこう指摘する。

今までに同様の措置を受けたのは、25 年前、犯罪組織マリアーナ団(Banda della Magliana)が通っているとされたチルコロ・コアラだけ。ダル・ヴェルメが同じイメージで括られているというのが大きな問題だ。

基本的に日本よりもイタリアのほうが、ライブハウスで演奏されるような音楽やクラブ文化に対して理解があると思っている。そもそもミュージシャンの絶対数が少ないからかもしれないが、ピニェートのような地区にいると、多様な人の流れを目の当たりにできるし、そういった人々が入り混じっての文化ムーブメントが起こっていると肌で感じる。ただ、下町の雰囲気や体制におもねらないインデ

ィペンデントな活動から、犯罪の温床、麻薬の売買、売春といった否定的なイメージと、より安直に結びつけられてしまうのも確かだ。ここにもやはり、現場を知る内部と、偏見だけで結論付けようとする外部とのあいだに、深い断絶があった。



【The Pills】

出典元：http://cinema.popcorntv.it/news/the-pills-sempre-meglio-che-lavorare-arriva-il-poster-ufficiale/14594

補足としてのエピソードを一つ。ピニェート地区を走る鉄道沿いに、トレンタ・フォルミーケ(Trenta Formiche)というまた別のライブハウスがある。我々おにぎりボーイズがここでライブを行ったときのこと。ボーカル用のマイクスタンドが足りないというので、急きょ店にあった長い筒状の民族楽器デジュリドゥにマイクを突き刺してマイクスタンド代わりにするという奇策を捻り出されたことがある。無茶苦茶すぎて思わず笑ってしまった。機材も設備も足りないまま、やることなすこと無茶ばかり。彼らの行うことは文化だ芸術だと呼ぶにあまりにもレベルの低いまがい物だと非難されれば、さして言い返すこともできないけれど、そんな中からも新しい潮流が確かに生まれている。2011 年から続くローマ・インディペンデントフィルム・フェスティバルや遺跡公園に大ステージを組んでのイベントプログラムも企画しているし、YouTube で独自のコントを投稿している人気の映像集団 The Pills もピニェートに関わりが深い。彼らは昨年、全国公開の映画「働くよりはマシ」(Sempre meglio che lavorare)を発表した。彼らはイタリア映画界において、もはや看過できない存在にまで成長している。

以前、ピニェートに通うミュージシャンの友人に意地悪な質問をしたことがある。「結局ピニェートに人が集まるのは、みんなマリファナを吸う場所をさがしているからではないの？」彼の答えはこうだ。「ピニェートでマリファナを吸いたがるのは、だいたい外国人。ライブハウスのオーナーは、意外とまっとうな人間ばかりで、客とアーティストを迎え入れる上で粗相がないようにとても気を使っている」。この答えを聞いてバカな質問をしたと恥ずかしくなってしまった。

興味を持って接したら意外と簡単に隔たりを飛び越えて、浅はかな偏見も消えるのに、その一歩を踏み出すのはなかなか難しい。特に日本では、学生の町京都であっても、ライブハウスには足を運びづらい、ある種の閉鎖的な空気感が残念ながら流れている。だが、今は一歩も踏み出さずして何でもインターネットで調べられる時代だ。ダル・ヴェルメは犯罪の温床、ネガポジの音楽は騒音、NOON のダンスは風俗を乱す。決めつける前に一度は彼らのやっていることをネット検索を通してでも知ろうとしてもいいのではないだろうか。是非の判断はそれからでも遅くはないはずだ。

（京都ドーナッツクラブ映画担当）

RiITALIA -イタリア再発見-　第 19 回

イタリアってなんだ？（後編）

国司 航佑

前回の記事（2016 年 4 月号）では「イタリアってなんだ？」という問を提起した。そこでは、自明とも思われた「イタリア」という概念を改めて問うた上で、結局、「トスカーナ語で書いたダンテがなぜイタリア語の父になったか」という具体的な問に行きついて記事を締めくくった。今回は、筆者が現在持ち合わせている知識を総動員して、この問に対する解に近づいていきたい。ただし、筆者は言語学者ではないため、以下に記すところには誤った情報が含まれているかもしれない。読者諸賢には、筆者の述べるところを半信半疑で楽しんでいただければ幸いである。

周知のとおり、イタリア語はイタリア共和国という国家において公用語とされている言語である。イタリア共和国は第 2 次世界大戦終結とともに誕生した国家であるが、その前身ともいえるイタリア王国においても、話されていたのはイタリア語である。それでは、イタリア王国が誕生する以前はどうか。19 世紀の後半まで、イタリア半島には一つのまとまった政治権力が存在しておらず、様々な小国が分立していた。「イタリア」という名の国家が存在していなかったのである。「イタリア」という国家が存在していなかったのであれば、当然「イタリア語」という言語も存在していなかったはずである、と考えたくなる。

ところが、「イタリア語」という言語は、「イタリア」という国家が誕生する前から、立派に存在していたと考えられる。分立していた小国においては、それぞれ現在の方言のもととなるような言語が話されていたが、イタリア半島の共通語として、イタリア語という言語は確かに存在していたのだ。例えば 19 世紀前半に活躍した 2 人の文豪、レオパルディとマンゾーニのケースを考えてみよう。前者はイタリア中部マルケ州の出身、後者はイタリア北部ミラノの出身であるが、彼らはともに、イタリア語を使用して執筆している。なぜ国家統一が達成される前から、統一言語が存在しえたのだろうか。

【レオパルディ（左）とマンゾーニ（右）】
出典元：https://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo_Leopardi
https://it.wikipedia.org/wiki/Alessandro_Manzoni

それは、イタリア半島に生まれ育った作家たちが、一つの言語モデルを共有していたからである。一つのモデルとは……。勘のよい読者諸氏は既にお気づきだろう。それは、詩人ダンテである。ダンテが生きた時代、「イタリア語」という言語は存在していなかった。あったのは、ヨーロッパ共通語としてのラテン語と、ヨーロッパ各地で話されていた諸言語である。そしてフィレンツェ出身のダンテは、公用語としてラテン語を、口語としてフィレンツェ語（トスカーナ語）をそれぞれ使用していた。

ラテン語という言語について、すこし解説が必要だろうか。ご存知の通り、ヨーロッパ全域はかつてローマ帝国によって支配されており、そこで使用されていた言語がラテン語である。イタリア半島においても、ローマ帝国が隆盛を誇った時代、公用語はラテン語であった。しかしローマ帝国は、5 世紀ごろゲルマン族の侵攻等をきっかけに分裂し始める。異なる言語との接触、および膨大な時間の経過によって、各地に新たな言語が誕生した。ラテン語を祖先にもつこのような言語を、ロマンス語と呼ぶ。現代語の中では、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語等がロマンス語のうちに数えられる。

ローマ帝国が崩壊し、人々がロマンス語を話すようになってからも、ラテン語は生き延びた。ヨーロッパの共通語であったラテン語によって、様々

な地域の人間が意思疎通を図ることができたからである。普遍言語の性質をもつラテン語は、まずキリスト教会の公用語として、さらには外交文書や裁判記録のための書き言葉として、使用され続けることになる。中世ヨーロッパにおいては、文字の読み書きができるということは、ラテン語の読み書きができることを意味した。他方ロマンス語は、民衆の話す言語に過ぎなかった。そのため、ロマンス語は当時、「俗語 la lingua volgare」(直訳すると「民衆の言葉」)と呼ばれ、知識人階級しか使いこなせないラテン語と峻別されていた。

だが、「書き言葉はラテン語」と決まってしまうと都合の悪いことも生じる。まずもって、ラテン語を読めない民衆に向けて文章を書くことができない。がそれだけでなく——ラテン語は普段の会話に使用されている言語ではなかったから——日常を描写するのが困難になる。この2つの問題が何より顕著に表れるのは、恋文(恋愛詩)を書くときであった。当時、身分に関わらず婦人は普通ラテン語を理解しなかった。また、普段話している言語を使用せずには、自らの感情の微妙な動きを表現できない。恋愛詩を作成するためには、どうしても「俗語」を使用する必要があったのである。

ところで最近、我が国でアモーレ(amore)というイタリア語が流行しているということをご存じかと思う。実はこの「アモーレ」、イタリア語という言語を考える上で、もっとも重要な単語の一つである。俗語での読み書きが始まった頃、前段落で述べたような事情があって、多くの文書は愛(=アモーレ)をテーマとしていた。ラテン語に代わってイタリア語が使用されるようになったきっかけは、愛を表現する必要が生じたことだったのである。ただし、ここで問題となる amore という単語は、日本語でいうところの「恋愛」のみを指しているわけではない。「愛」はキリスト教において、神の本質を表す概念でもある。中世ヨーロッパにあっては、神への愛こそが本当の愛であり、また、だからこそ詩歌の中では愛した貴婦人は神の使い(天使)に例えられた。

すこし、話が横道にそれてしまった。しかも、「イタリア語ってなんだ?」という問に対する解を模索していたのに、いつの間にか「イタリア語」を自明の存在として話を進めてしまっていた。ここは一旦、ダンテまで戻る必要がある。先程述べた通り、ダンテは、ラテン語とトスカーナ語の両言語を使用していた。このトスカーナ語という言語こそ、トスカーナ地方において話されていた「俗語」なのである。ダンテは、『新生』、『神曲』、『饗宴』といった文学作品をトスカーナ語で執筆し、『帝政論』、『俗語詩論』などの研究書をラテン語で執筆した(前者3作品の主題は、まさに amore である)。

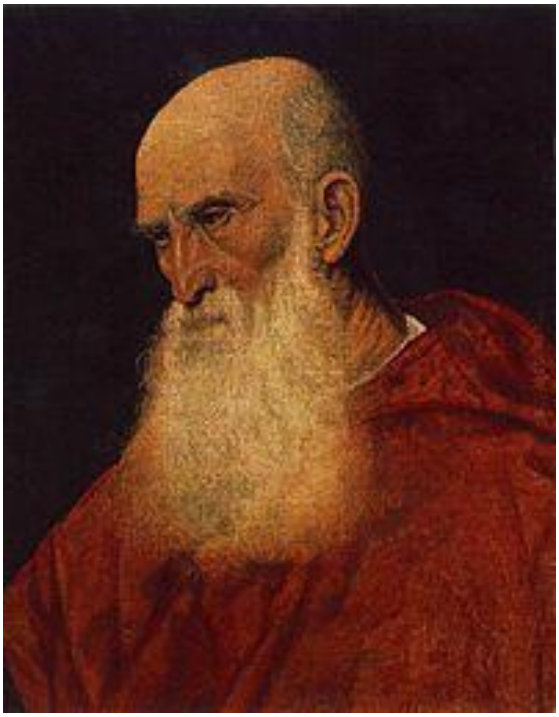
だが、俗語で執筆していた作家はダンテ以前にも存在していた。だから、ダンテが執筆活動にあたりトスカーナ語を使用していたということ自体は、特筆するに値することではないかもしれない。我々が問うべきは、なぜダンテの使用したトスカーナ語が、その後イタリア半島の共通語になったのかという点である。そのことを考えるには、実は、約2世紀後のイタリア半島の情勢を見る必要がある。この時期に初めて、半島全域を巻き込んだ共通言語に関する論争、いわゆる「言語論争 la questione della lingua」が生じたからである。

それまでは、ラテン語を共通語としながらも半島各地では異なる俗語が話されており、そこに大きな問題はなかった。だが、16 世紀に入ると情勢が変わる。フランスやスペインに大国が成立し、いまだ小国が分立していたイタリア半島は、彼らの標的となった。イタリア半島の覇権をめぐって大国がしのぎを削る、いわゆるイタリア戦争が勃発するのである。半島の小国は、それぞれ思い思いに大国と同盟を結び、また状況に合わせて同盟国を変えた。そしてそれ故、互いに敵対関係に陥った。戦争の舞台となったイタリア半島は、こうして荒廃の一途をたどることになる。

こうした状況を憂い、イタリア半島の統一を模索した人物がいる。かのニッコロ・マキャヴェッリがその人である。彼は、統一されたイタリアの言語がどのようなものであるべきかという問題も考えていた。マキャヴェッリは、フィレンツェのメディチ家による統一を望んだため、半島の統一言語(=イタリア語)は、当時のフィレンツェで話されていた言語になるべきだと主張した。そして、このマキャヴェッリの主張が受け入れられ、その後、トスカーナ語がイタリア半島共通語になっていく……というわけではない。対立が深まるイタリア半島においては、メディチ家=フィレンツェ中心の統一

は、無条件に支持されるものとはなりえなかった。当時のフィレンツェ語にイタリア半島共通語という特権が与えられる――このことに抵抗を感じていた者は少なくないはずである。

半島の言語統一の必要が生じたのには、実はもう一つ理由があった。16 世紀は、活版印刷術が急速に発達した時代でもある。活版印刷が普及するまでは、写字生と呼ばれる人々が手作業で本をコピーしていたため、作品の伝承の過程で言語上の変化が加わってもさほど大きな問題ではなかった。しかし、活版印刷によって全く同じ文書が一挙に流布できるようになると、どの言語を基準にすべきかという問題が生じる。そこでひときわ強い存在感を放ったのが、ヨーロッパ最古の出版社の生みの親アルド・マヌツィオと、その参謀とも呼ぶべき人文主義者ピエトロ・ベンボであった。



【ティツィアーノによるベンボの肖像画】

出典元：https://it.wikipedia.org/wiki/Pietro_Bembo

ベンボが著した『俗語論』は、上掲の言語論争に決定的な影響を与えるものとなった。『俗語論』においては、当時のトスカーナ語ではなく、（ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョが活躍した）14 世紀のトスカーナ語こそイタリア語の規範となるべきだという主張が展開されている。14 世紀のトスカーナ語は、ヨーロッパ文学史上に燦然と輝く 3 人の作家によって完成されたものであり、「イタリア語」の模範となる資格を十分に備えている、というのであった。言語の文化的意味合いを強調したことによって、政治的に対立する半島各国にも受け入れやすい主張となったのだろう。加えて、出版者マヌツィオがベンボの理論をすぐに実践に移すことができた、というアドバンテージもあった。結局ベンボの理論が論争に勝利し、14 世紀のトスカーナ語は、16 世紀以降、徐々に半島共通の書き言葉としての地位を確立していくことになる。

ただ実のところ、ベンボ自身は、韻文についてはペトラルカの『カンツォニエーレ』を、また散文についてはボッカッチョの『デカメロン』をそれぞれ参照すべきだ、と論じており、ダンテの（『神曲』の）文体には欠点があると考えていた。だが、ペトラルカもボッカッチョも、トスカーナ語に関してダンテの作品から甚大な影響を受けている。また、その後イタリア半島で活躍した作家は、おしなべて陰に陽にダンテの言語から影響を被っている。そのためダンテは、ベンボの否定的な評価にも拘らず、イタリア語の父とみなされるようになるのである。

以上、「トスカーナ語で書いたダンテがなぜイタリア語の父になったか」という問に対して、筆者なりの解を提示した。あまりに単純化した説明になってしまったおそれがあるが、それは、イタリア語の歴史のもつ特殊性を簡潔に伝えるためであった。16 世紀前半、政治的な統一を果たせなかったイタリアは、ある意味では文化的に統一を実現していたのである。イタリアの標準語は、政治の中心でなく、文化の中心に合わせて定められた。こうした歴史をもつ言語を、筆者はイタリア語以外に聞いたことがない。

（京都外国語大学講師）

編集・発行 /（公財）日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL：(075)761-4356/FAX：(075)761-4357
E-mail： centro@italiakaikan.jp
URL： http://italiakaikan.jp/